



2021年度ランゲージラウンジ活動報告

著者	西 香織, 鈴木 陽子, コンスタンティネスク チェザル, 大森 洋子, 洪 潔清, 李 善姫, 塩谷 祐人
雑誌名	明治学院大学教養教育センター附属研究所年報 : synthesis = The annual report of the MGU Institute for Liberal Arts
巻	2021
ページ	14-18
発行年	2022-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/00004333

2021年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在は、英語とスペイン語においてILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら(英語)、あるいは、オンライン学習ツールを用いて(スペイン語)、自律学習ができるような支援を行っている。

これらの活動に加え、言語(ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、フランス語)ごとに曜日・時限を決めて、ランゲージラウンジにて母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学生の外国語学習のサポートを行ったりしている。

今年(2021)度も昨年(2020)度に引き続き、新型コロナウイルスの流行により、緊急事態宣言が出るなどしたため、外国語の授業はほぼすべてがオンライン(同時双方向型)で行われた。そのため、ランゲージラウンジもほぼ全面的にオンラインによる実施となったが、活動に携わる教員にとっても語学教育のあり方を見直す良い機会となったように思われる。

次年度についても、対面かオンラインかを問わず、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program (ILSSP)、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、二つのプログラムは春・秋学期共にWeb会議ツール(Zoom)を用いてオンラインにて実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日(11:00-15:30)と水曜日(11:00-15:30)に実施した。担当者は各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ(学習記録)を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。今年度は春・秋学期共に受け入れ可能な人数を大きく超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の参加者数の詳細は表1の通りである。

表1 ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	2	2	0	1	2	1	0	1	0	1	3	1	3	1	20
秋	3	0	1	1	1	2	0	0	0	1	3	1	3	0	3	1	20

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休みに実施した。各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英語でアウトプットする機会を求める学生に向けて、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。今年度（12月末時点）のセッションの提供数と実施数は表2の通りである。

表2 English Clinicの実績

	春学期	秋学期	全体
提供数	56	50	106
実施数	32	37	69
実施率	57.1	74.0	65.1

オンラインでの実施となったことで、キャンパスを問わずプログラムに参加することが可能になり、横浜キャンパスで実施していた時よりも3、4年生の参加者が増えたことが特徴的であった。来年度以降もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえることを期待したい。

2.2 ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2021年度ランゲージ・ラウンジ（ドイツ語）は『ドイツ語deランチ』と題し、森本康裕氏（本学非常勤講師）が担当した。コロナの影響のため対面形式ではなく、manabaとZoomを併用した遠隔形式で行われた。開催日時は春・秋両学期を通じて毎週月曜と金曜の週二回ずつ、それぞれ昼休みの30分間（13：00～13：30）の実施となった。

月曜日はオンデマンド型の形式で、担当者がテキストファイルによってドイツ語やドイツ語圏の文化・社会的な問題について紹介・解説し、一方で金曜日はZoomによるリアルタイム型（双方向型）で行われ、参加者とともにさまざまなトピックについて議論が交わされた。参加者は平均して3名程度で、主にドイツ語初級を履修する1年生および中級を履修する2年生の学生だったが、ドイツ留学経験のある3年生以上の学生や、時にはドイツ語未履修者が参加することもあった。講座の教材としては、主にインターネットで利用可能なサイト（“YouTube”や“Yahoo Deutschland”、あ

るいはその他のドイツ語圏のニュースサイト)、あるいは日本語に翻訳されたドイツ語学習資料や映像作品を利用し、ドイツ語リスニングや基礎文法項目の解説、重要なフレーズや単語の確認、すでに必修授業で学んだ文法事項の復習、典型的なドイツ語の言い回しなどの学習とともに、現代のドイツの時事的な問題について参加者間で意見交換を行った。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、昨年に引き続きオンラインコースを行なうとともに、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間も設定した。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVEglobalは、今年度も利用した。

オンラインコース：今まではそれぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが目立っていたが、留学の実現の可能性が見えてこない現状では、応募者の減少が目立った。学習期間は長くなった一方で、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点であり、さらに工夫が必要である。

一方、会話スペースは、今年度も昼休みが短縮されて、35分程度のセッションが続いた。今年度の特徴としては、具体的な目標をもった学生の参加が多かったが、そのような学生が減少しているためか、またオンラインでの広報にとどまっているからか、参加者が少なくなったようである。しかしながら、時機にあったスペインのテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモチベーションアップにはつながったと言える。次年度については、より学生が参加しやすい方法を考えて、より活発なスペースになるように努力を続けたい。

2.4 中国語部門：洪潔清

2021年度中国語部門「中文会話倶楽部」の活動は、昨年度に続きオンライン (teams) での開催となった。今年度は非常勤講師に依頼し、通年毎週木曜日の昼休みに (30分~60分) 実施した。春学期は、参加者数は数名程度ではあるが、毎回参加者がいた。参加者が初級レベル (学習歴半年以内) である場合は、それぞれの要求に応じて、中国語の発音チェックや、簡単な会話練習、質問応答などを行った。参加者が中級以上のレベルである場合は、旅行や故郷、好きなアイドル、自分の研究テーマなどについて、発表や議論を行った。このように、一学期の練習を通して、聞く力と話す力を大いに伸ばした学生からは好評であった。

秋学期は、一部の授業が対面形式に切り替えたため、2限と3限に授業を持つ学生はオンライン

による倶楽部活動の参加が難しくなった。そのため、秋学期の前半では、スピーチコンテストに参加するための発音チェックや留学出願書の中国語文章の修正といった具体的な目的を持つ学生が参加してくれたが、後半に入ると、参加者が一転して減り、一人もいない状況が何週間も続いていた。来年度は大学の授業が対面形式に戻る可能性を考慮に入れて、学生の要求に柔軟に応じながら、倶楽部の開催形式と開催時間の設定を工夫する必要があるように考えます。

2.5 韓国語部門：李善姬

2021年度韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンA（初級）」、「韓国語ビタミンB（中上級）」は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で実施された。

各講座の実施状況は次のとおりである。

1) 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンA（初級）」

高槿旭先生により毎週水曜日（12:55～13:25）実施された。参加人数は、春学期は5～19人、秋学期は2～9人が参加した。

2) 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンB（中上級）」

崔静仁先生により毎週木曜日（12:55～13:25）実施された。参加人数は、春学期は1～16人、秋学期は3～10人が参加した。

●学習内容

学校生活、食事、買い物、映画、音楽など身近なテーマを中心に、気軽に自由な雰囲気、より自然な韓国語表現を身につけるようにした。テーマは、manabaで事前に知らせ、学生が前もって準備し、参加するようにした。

また、韓国の文化や習慣などを紹介し、日本と韓国の違いについて語り合った。

そして、オンライン授業の特徴を生かし、映像や写真などの資料をみせることで、学生の興味や理解を一層深めるようにした。

●学生の反応と成果

manabaで会話のテーマを前もって知らせることで、予習してくる学習者も多く、効率的に学習できたと思われる。

学生の意見としては、「話したい内容を韓国語で考えて話せるのが楽しい」、「少人数で話しやすい」、「韓国語の授業はとっていないけど、ランゲージラウンジで会話できて嬉しい」という意見があった。先生よりは「最初は発言する人が少なかったが、雰囲気に馴染んでからは、1年通して参加する学生もいるなど積極的に参加するようになった」ということが伝えられた。

総括してランゲージラウンジを実施することにより、学習者の話す能力の向上、韓国語学習のモチベーションをあげることができたと思われる。

2.6 フランス語部門：塩谷祐人

2021年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が行った。昨年度は週に2回の開催としていたが、今年度は毎週月曜日にオンデマンドによるコンテンツを配信とした。

登録者数は80名と多く、一定以上の需要があり、それに応えた活動になっている。ただし、後期は昼休みが40分しかないことに加えて授業形態が対面／オンラインに切り替わったこともあってか、視聴人数は減少した。後期も引き続き学生が継続して参加できるように工夫することが、今後の課題として挙げられる。

学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設けるために立ち上げたが、今年度も常時10名以上の学生が視聴し、コメントを毎回のよう寄せられる学生もおり、またコメントを共有することで学生間の刺激にもなっているようで、目的に合ったラウンジの運営ができていると考えている。

コンテンツに関しては、授業の補佐的なコンテンツとして位置づけた文法的な内容のものよりも、フランス語の勉強方法（フランス語検定関連を含む）や発音、フランスの文化を扱ったコラムの時のほうが学生からの反応が良いように思われた。これはオンラインにしたことで、通学時間や空き時間を利用してコンテンツを活用している学生がいることも無関係ではないであろう。こうした状況も踏まえて、今後は語学と文化コラムのバランスを再調整しつつ、継続していくことが肝要であると考えられる。

またZoomを利用した交流会も行っているが、人数が多いことと昼休みの時間が短いこともあり運営が容易ではない。これは今後もオンラインで継続するのであれば、改善すべき課題となっている。